

# 中国近代史学論文選訳注（続三）

—章炳麟「中国通史略例」等二篇—

名古屋大学東洋史研究報告 四十七号 二〇一三年三月発行

土王高鹿岸下浅  
屋 島 野田  
天 箸 梨 史 渡  
洋 驕 遠 奈 菜 梓 来

## はじめに

中国における「新史学」は、主に梁啓超をはじめとする変法派によってリードされた。しかし、のちの「革命史」への展開を考えるならば、革命派によって提起された新たな史学こそが、むしろその源流たりうるだろう。その旗手は、他でもなく、章炳麟である。彼は日本の歴史学とも激しく対立し

た。

章炳麟（一八六九—一九三六年）、号は太炎、浙江省余杭の人。外祖父朱有虔から小学（文字学）のほか、黄宗羲、顧炎武、王船山などを学ぶ。てんかんの病があり科挙を断念、杭州の詒経精舎で、兪樾の下、春秋左氏伝を重視する古文学を修めた。一八九五年に康有為の組織した強学会に加盟、翌年、梁啓超主筆の『時務報』に参加、今文派の梁らとは意見が合わず、戊戌政変ののちには台湾に、さらに九九年秋まで日本

に亡命した。一九〇〇年、辮髪を切る。翌年、革命を論じた文章をあつめた『扈書』を出版、〇三年、「康有為を駁して革命を論ずる書」を執筆、光緒帝を侮辱して逮捕された。〇六年出獄、東京に逃れ、中国同盟会に参加、機関誌『民報』の主筆となり、次々に革命宣伝の文章を書いた。他方で伝統学術を再評価する『国故論衡』（二〇年）等を上梓、魯迅、周作人、錢玄同、許寿裳、朱希祖、沈兼士などに音韻、文字学を教授した。一二年、自ら命名した「中華民國」が成立、帰国後、孫文と意見を異にして袁世凱に接近、一七年、再び孫文との連帯を強め、護法軍政府秘書長の職を受諾、二〇年秋には、連省自治方式によって、軍閥混戦の中国に安定した政府を樹立しようと考えた。しかし、共産党には声高に反対し、孫文の国共合作にも反対の立場をとった。晩年の三五年には蘇州に章氏国学講習会を設立、中国伝統学術の経学、史学、諸子学、文字学について講義をおこなった。<sup>①</sup>

本稿は、章炳麟による初期の代表作『扈書』（重訂本、一九〇四年初版）に収録された歴史論の中でも、彼が構想した中国史の全体像をよく表す「中国通史略例」を取り上げ、訳注を施して紹介するものである。この「略例」は、一九〇二年頃、梁啓超の「新史学」に触発された章が執筆したもので

あったが、果たして、そこで示された中国史像は、梁が提起したそれに比べ、いかなる特色を有したのか。この当時、すでに革命に傾きつつあった彼の歴史論を窺いたい。また本稿は、彼の晩年にあたる一九三三年五月に行われた講演録で、章氏国学講習会「章太炎先生講演録」（一九三三年）に収録された「説史と文化復興との関係（説史与文化復興之關係）」についても、訳注を施し、紹介するものである。満洲事変勃発後、彼は日本軍に対する徹底抗戦を訴え、それとともに、保全すべき国家の範囲を歴史から明らかにし、歴史学の有用性と歴史教育のあるべき姿を示したのがこの一文である。これは日本との歴史をめぐる戦いでもあったが、果たして、彼は歴史学を通じていかに日本と対決したのか。彼の戦時下における歴史論を窺いたい。

第一章に示す「中国通史略例」は、のちに訳出する通り、彼が執筆を志した「中国通史」の概要について述べたものがあり、具体的な目次も示された。これは当時日本にあった章が、『新民叢報』誌上に連載された梁啓超「新史学」に触発されて構想したものであり、自ら梁に書簡を宛ててその初歩的構想も披歴している。<sup>②</sup> これによれば、その構想が、梁と同様、中国史を王朝交替の歴史と一線を画した「社会政治進化衰微」

の通史として描こうとするものだったことがまず注目される。

一方、梁が二十四史を「二十四姓の家譜」、中国の旧史を「鄰猫生子」(H・スペンサーの言葉。隣家の猫が子猫を産んだの意。どうでもよいこと)と貶めたのに対し、章がこうした伝統批判に与さなかったことがまた注目される。すなわち、章は民衆を鼓舞して未来をひらくためには「紀伝」もまた必要であるとして、伝統史学をベースとしてそれを鍍直そうとしたのであり、それが章の構想した「中国通史」であった。

章炳麟の学術については、すでに古文派の彼が奉じた『春秋左氏伝』が夷狄と中国を峻別するもので、より民族主義的・革命的であったこと、彼が従事した考証学の行き着く先として、「六経皆史」(章学誠)の説をさらに押し進め、六経を「義」を記した「経」(バイブル)としてではなく、「事」を記した「史」とみなし、ゆえに孔子を教主ではなく、歴史家とみなしたこと、などが指摘されている。<sup>④</sup>要するに、章はもはや儒教を経学としてではなく、諸子の一として、「国学」という全体の中に位置づけ、愛国心の拠りどころとしたのであった。「国学をこれ知らざれば、いまだともに愛国を言うべきものあらざるなり」である。<sup>⑤</sup>

こうして従来の「史」もまた、「経」に従属するものでは

なく、国学そのものとして重視された。「以前の最も好い歴史、例えば、『春秋』『史記』『漢書』には、學術、文章、風俗、政治のいずれも見えるのに、どうして家譜などであろうか」、「自らの国の歴史はつまり自らの家のことであって、隣家などではない。隣家は外国であって、外国史もおよそ見なければならぬのに、ましてや本国史はなおさらである」。これらはいずれも梁啓超の改良主義的立場に立つ伝統史学批判に対し、民族主義的立場からそれを擁護したものである。章は最終的には、「経は古史、史は即ち新経なり」と述べ、「史」こそが新たなバイブルであるとするのであり、このバイブルとは民族にとつての究極的拠りどころを意味するものであっただろう。章が構想した「中国通史」には秦始皇、漢武帝の考紀も見えれば、康熙・雍正・乾隆三帝の考紀も見え、洪秀全の別録(のち考紀)も見えれば、康有為の別録も見える。漢族や革命派が中心というわけでは必ずしもなく、むしろ「中国」の伝統重視の姿勢がより窺える。

第二章に示す「読史と文化復興との関係」は、のちに訳出する通り、歴史を「一国の帳簿」および「棋譜」にたとえ、これによって一国の財産の過去と未来に通じることができるとし、最終的には、それが各学問の基礎であるとして、一国

の文化復興のため歴史教育の重要性を訴えるものである。これはまた、歴史を抛りどころとしつつ、「中国」の領土と民族をめぐって、日本と争うものでもあった。

よく知られる通り、章炳麟は劇烈な排満革命を唱えたが、その主張はすでに辛亥革命前に揺らぎつつあった。「中華民国解」（一九〇六年）では、「中国」は文化概念であり、満洲族も同じ中国人たりうるとして立憲君主制を唱えた態度に対し、「中国」は地理概念でもあり、「夏」「華」「漢」は種族概念であるとして、漢民族中心の革命を主張した。<sup>(8)</sup> 排除される満洲族は、故地に帰り、「漢人は漢を治め、満人は満を治めればよい、ということであった。<sup>(9)</sup> しかし、彼はまた一方で、「瓜分」を恐れる態度らとの論争を通じて、文化の高下に基づく、版図の回復・維持構想をも掲げるのだった。すなわち、まず漢代に郡県が置かれた朝鮮、ベトナムを、つぎに明代に土司が置かれたミャンマーを回復し、さらにチベット、ウイグル、モンゴルには総督府を置いて同化政策を進める、という構想がそれである。<sup>(10)</sup> この「読史と文化復興との関係」で展開される朝鮮や満洲の歴史的な帰属をめぐる議論は、章のこうした辛亥革命時期の構想の延長線上にあると見てよいだろう。満洲事変後の章は、「辛亥の役では、幸いに民衆の協力を頼み、

先人の遺産を光復し、満洲の害を去ったが、日本の患は除かれなかった。今、当局の怠慢によって、二寇が協力し、危険が輿地にまで及び、「中略」辛亥革命の功績もまたことごとく失われてしまう」と述べ、辛亥革命の成果が失われることへの危機感を表明していたのだった。<sup>(11)</sup>

なお、章の日本観については、曲折を経つつも、その学術を全面的に否定するものであった。彼の代表作の一つ『国故論衡』では、「日本にはもともと文字がなく、「中略」文字もないのに学問を言うのは恥ずべきである。今、諸芸はいずれも西洋を模倣し、十に三四を得たとしても、博士は終生筆写係で、五六年たつてそれが尽きると、また西洋に仕入れに行くのであり、自ら作ったものは少しもなく、いたずらに他人の口説に習うだけ」云々と痛烈な批判を展開しており、それと対照させながら、自前の学問を有する中国（とインド）の優位性を述べるのだった。<sup>(12)</sup> 彼が日本に徹底的に対抗し、また周辺に対して同化を進めようとした背景には、このような自らの学問や文化に対するゆるぎない自信があった。章はつとに康有為や嚴復といった進化論者との論戦を通じて、直線的進化論に異議を唱え、また西洋との融和に反対し、たとえ貧しくとも自らの「国性」を保つべきことを主張して

いた。<sup>13</sup> 満洲事変当時にあつては、古代史を客観的に再検討しようとした胡適ら疑古派を「歴史を抹殺」する「魔道」として口を極めて批判した。<sup>14</sup> 戦時下にあつて徹底的に日本に抵抗しようとした彼の力の源泉となつたのは、このような自らの国家や民族の純粹性や絶対性に対する信念であつたに相違ない。とはいえ、こうした国粹主義的思想は、彼自身も認識していた通り、危険を孕むものでもあつた。これは章が、「欧州と日本においては、すでに民族の独立は遂げられたのであるから、国粹に「事」を求めることは必ずしも急務としなくてもよいし、国粹に「義」を求めることは他を侵略するか、さもなければ奴隷牛馬にすることに導く」と述べていた通りである。もつとも、彼はさらに続けて、虐げられている側である中国には「当てはまることではない」と述べるのであつた。<sup>15</sup> 果たして、この言葉は、満洲やチベット、ウイグル、モンゴルの人々の耳にはどう響くのか。

章は中国共産党を「ロシア党」と称してそれに反対したが、それは共産主義に反対だつたからでは必ずしもなく、むしろ同党が「ロシア人の勢力を借りて、我われ中華民族を圧迫する」と考えたからであつた。<sup>16</sup> つまり、章にとつては、その後

の民族解放や帝国主義打倒を目指す革命思想とは共振するところが小さくなかつたにちがいない。というのも、例えば、中国共産党の「五老」の一人として知られ、中華人民共和国成立後、中国人民大学初代校長、中国史学会副主席を担つた呉玉章が、『中国歴史教程緒論』（一九三六年頃執筆）で、立場に違いがあるとしながらも、真つ先に章のこの「説史と文化復興との關係」を引用し、中国史を研究する意義を説いていたからである。呉にとつて、章の「一民族は必ず自己の歴史に習熟しなければならず、そうしてはじめて民族の自尊心と奮闘する自信を獲得でき、他の民族に滅ぼされることがない」という一節は、「甚だ沈痛」として、胸に響いたのだつた。<sup>17</sup>

なお、本訳注の「はじめに」は土屋が執筆し、第一、第二章は鹿島、岸、下田、浅野が訳注稿を作成し、王、高、土屋が加筆修正を施した。また、凡例的なこととして、①底本は、第一、二章のいずれも、上海人民出版社編『章太炎全集』（同社、二〇一四―二〇一八年） 煇書重訂本および演講集所収本を用いた。なお、第一章は徐復注『煇書詳注』（上海古籍出版社、二〇〇〇年）をあわせ参照したが、訳注の重複はできる限り避けた。②訳文中、原文に付された割注を（ ）に、訳

者による注記を「」に記した。③紙幅の関係から、一部割注の訳出ならびに「中国通史目録」の訳注を省略した。④人物の略歴等について、歴史事典類など一般的な工具書に拠ったものは、逐一出典を示さなかった。

## 注

- (1) 以上、河田涕一「章炳麟」(近代中国人名辞典修訂版編集委員会編『近代中国人名辞典(修訂版)』、霞山会、二〇一八年)、八〇一―八〇二頁より抜粋、一部改。
- (2) 「章太炎来簡 壬寅六月」(『新民叢報』一三三号、一九〇二年)。
- (3) 梁啓超「新史学」第一章中国之旧史学(『新民叢報』一四号、一九〇二年)。
- (4) 島田虔次「中国革命の先駆者たち」(筑摩書房、一九六五年)、一六七―二七頁。また、章の史学思想については、小林武「章炳麟の歴史叙述をめぐって」(『東方学』八二号、一九九一年)、湯志鈞「章太炎の史学思想」(一九八五年、同「経与史」康有為与章太炎)、中華書局、二〇一八年)、同「中国通史目録」和『新史学』(『歴史檔案』一期、二〇〇七年)参照。その他、章炳麟研究の全体については、上海人民出版社編『章太炎全集』(同社、二〇一四―二〇一八年)附録所収「章太炎研究文献書目初編」に窺うことができる。
- (5) 国学講習会発起人「国学講習会序」(『民報』七号、一九〇六年)。
- (6) 「中国文化的根源和近代学問的発達」(一九〇七―一九一〇年、前掲『章太炎全集』演講集)、八一―八二頁。また、「答鉄錚」(一九〇七年)にも同様の内容が見える。いま西順蔵・近藤邦康編訳

『章炳麟集 清末の民族革命思想』(岩波書店、一九九〇年)、二五一―二六八頁。

(7) 「論說史之利益」(一九三五年、前掲『章太炎全集』演講集)、六〇一頁。

(8) 「中華民国解」(一九〇七年、いま村田雄二郎責任編集、深町英夫・吉川次郎編集協力『民族与国家「辛亥革命」』岩波書店、二〇一〇年)、三二〇―三二八頁。

(9) 「排滿平議」(一九〇八年、前掲『章太炎全集』太炎文録初編)、二七六頁。

(10) 注(8)に同じ。

(11) 「与馮玉章」四(一九三三年、前掲『章太炎全集』書信集)、一〇八三頁。

(12) 「国故論衡」下巻、原学(一九一九年、前掲『章太炎全集』国故論衡校定本)、二八一頁。

(13) 「俱分進化論」(一九〇六年)、「社会通詮商兌」(一九〇七年)参照。いまいずれも前掲西順蔵・近藤邦康編訳『章炳麟集』所収。また「救学弊論」(一九二四年)にも「今之学子慕遠西物用之美〔中略〕又必実見遠西之俗行於中国然後快。此与元魏、金、清失其国性何異」と見え、西洋との同化によって「国性」が失われることへの危惧が述べられる。前掲『章太炎全集』太炎文録続編、九三頁。

(14) 「歴史之重要」(一九三三年、前掲『章太炎全集』演講集)、四九三頁。

(15) 「印度人之論国粹」(一九〇八年)、いま前掲島田虔次「中国革命の先駆者たち」、二四八―二四九頁、また前掲西順蔵・近藤邦康編訳『章炳麟集』、三五四―三五五頁。

(16) 「我們最後の責任」(一九二五年)、全集未収、湯志鈞編『章太炎年譜長編(増訂本)』上冊(中華書局、二〇一三年)、四七八頁。

(17) 吳玉章講授『中国歴史教程緒論』(新華書店、一九四九年)、三一四頁。

## 一、中国通史略例

中国では、秦漢以降、史籍が多く編まれた。紀伝体は司馬遷から始まり、編年体は荀悦によって築かれ、紀事本末体は袁枢によって作られた。<sup>(1)</sup> いずれも具体的な記述であり、抽象的な理論ではない。杜佑や馬端臨は制度を書きつらね、類別を設けたが、これは分析法に近い。<sup>(2)</sup> 君卿〔杜佑〕は評議が簡単で短く、貴与〔馬端臨〕は持論が浅薄で道理から外れている。両者の優劣は、計算に巧みな人であっても計ることができない。<sup>(3)</sup> しかしながら、演繹法については、両者のいずれもそれを尽くしていない。衡陽の聖人〔王夫之〕は『資治通鑑』、『宋史』を読み、その論評はもつとも雅馴で、「上品で字句が洗練され」、その書き方も演繹法に近い。<sup>(4)</sup> ところが、議論が反復して一定せず、その表現も筋道が立っていない。これを織り姫にたとえるならば、一日に七回機織りしても、美しい模様を織り成すことができないがごとしである。<sup>(5)</sup> 社会、法政の盛衰変遷の原理に至っては、彼はこれに暗く、明らかにしていない。

王鳴盛や錢大昕といった諸賢は、<sup>(6)</sup> 根本に暗く、末節を攻め、なんと大局を心得ず、賢者に恥じるものではないか。<sup>(7)</sup> 今、『中国通史』を編修し、百卷にまとめ、哲理を溶け込ませ、末節を追求する弊を払い、深奥を汲み取り、<sup>(8)</sup> 墨守の惑いを拭い去る。こうすれば科挙の受験参考書や役人のための帳簿類、戦記の類とは異なりえよう。<sup>(9)</sup>

西洋における歴史書の編纂は、概ね時代を区分する。しかし、中国ではただ書・志のみを貴び、事柄の種類を分けるもの、時代を区分しない。この両者は互いに縦糸と横糸をなすものである。啓蒙の役割は、要点を挙げ、古今の進化の道筋を知らせることにある。ゆえに時代を区分することは、学校の教育に適している。一方、詳しく研究・列挙し、それぞれを専門科目とするのは、一事の文明と野蛮、一物の進歩と退歩を比較して知ることができるようにするためであり、このような分類は、学問を完成させ、議論するために行うものである。これはまた、地理を記録することが、あるものは郡国を主とするので、山や川は付録に見え、その起点と終点は、必ずしも詳述されないのに対して、あるものは山川を主とするので、一つの山を記述するのに必ずそのつながりやひろがり、一つの川を記述するのに必ずその始めから終

わりまでを述べきわめ、郡国によつて境界を設けることなどできない、ということと同様である。昔、漁仲〔鄭樵〕は粗略であつたが、意を用いたのは〔『通志』の〕「諸略」にあつたようである。今またその義法（道理）になつた方法）にしたがい、改めて「典」と命名する。これは華嶠（なまきやう）がもともと用いた名称である。<sup>14</sup>

これらの「典」が述べるところは、多く制度に類する。人の世の雑然とした出来事については、制度に区分することができないが、それらの事柄で社会の興廢や国力の強弱に関係しているものは、瑣末なことではない。会稽の章氏〔章学誠〕が言うことには、後世の人が歴史を編む場合は、『尚書』の体裁を併せて採用すべきとのことで、『金縢』、『顧命』（いずれも『尚書』中の篇名）は一つの事柄について顛末を詳しく説明している。<sup>15</sup>機仲〔袁枢〕の『通鑑紀事本末』が〔『尚書』と〕暗合しているのは自然なことであり、これはまた大勢の赴くところで、そうならざるをえないと言える。ゆえに、またおよそ人の世の出来事を挙げ、十篇を著し、「記」と名付ける。西洋の社会学と言へば、社会静学と社会動学の二種類がある。社会静学によつて過去を記録し、社会動学によつて未来を予見する。<sup>16</sup>通史も同様であり、典があれば人文がおよそ備わ

り、古今を追跡でき、過去を記憶するに足る。もし士気を奮わせて、人々を感動させるのであれば、紀伝に頼らざるをえない。そこでいま、「考紀」「別録」数篇を作る。「そこでは」法政、學術、種族、風教の四者に関わることがなければ、文帝、景帝のように聡明で、房玄齡、魏徵のように賢明で、<sup>17</sup>胡亥のように暴虐で、李林甫のように邪（よこしま）であつても、一切記録せず、ただ「帝王」、「師相」の二表に列ねるだけである。昔、承祚（しやうそく）〔陳寿〕が『益部耆旧伝』を作つた際に、蜀の人材を小人から大人まで余すところなく列挙したが、『蜀志』を作つた際には、列伝がいくばくもなかつた。<sup>20</sup>思うに、史官が重んずべきところは、褒めたり譏つたりすることではなく、未来を予見することを職務とするのであれば、これで事足りるからだろう。〔割注略〕

列挙する表五篇は、はじめに「帝王」をおき、これより「考紀」を省略する。また「師相」を表とし、「別録」を省略する。儒林伝、文苑伝にあるものについては、すべてを挙げ尽くせないが、その大筋の内容は、すでに「文言」、「學術」の二典に見えるので、これもあらためて伝に作る必要はない。このためさらに「文儒表」を作つて、およそ順序をつけ、その系統に従わせるだけである。地理の古今沿革については、



必ず典を作るのであれば、繁雑となって整理がつかなくなってしまう。職官もまた同様であり、孟堅〔班固〕の『漢書』「百官公卿表」は表にしただけであり、一代でさえそうだったのに、ましてや古今の変革を記すことなどできようか。ゆえに「帝王表」の後に、「方輿」、「職官」の二表をおき、のちの「師相」、「文儒」とあわせて、「表」を作ることを全部で五つである。

史官の職責の範囲は、今と昔では異なっており、これより歴史の体裁の変遷もまた、その状況を各おの異にしている。上古の瞽史〔楽師と史官〕と巫祝〔占卜と祭祀を掌る〕は遵守すべき法度が近く、保章〔観測を司り、吉凶を見る〕、靈台〔天文を司る〕も連携して政務を執る。ゆえに、歴史を編纂する際、必ず神話を詳細に記す。時代が降って、司馬遷、班固に及んでも、この方法は改められることがなかった。魏晋以来、神話はごく少なくなり、律曆〔楽律と曆法〕や五行はただ旧名を踏襲し、変えようとしなかっただけで、その内容はすでに司馬遷や班固と大きく異なっている。しかし、時代を遡って、昔の賢人たちと比べると、精彩か暗澹か、その上下の隔たりは非常に大きい。これは一方が文儒であり、一方が専職であるからである。いわゆる史学の進化というものは、塵芥

を掃き清めることだけをいうのではなく、古いものを打ち破り、新しいものを打ち立てることをいうのである。後世の経説は、本来の意味がすでに失われてしまっている以上、あらゆる常道がどこから始まったのかわからなくなり、いたずらに神話を断絶させようとしても、これを貫徹させる新しい理論がない。それが些末であるのは、まことにもつともなことである。もしもともと経術を知っている者であれば、史を作るのがなおまさっているようである。允南〔譙周〕の『古史』は、昔は子長〔司馬遷〕を超えると伝えられていたが、今は見ることができない。顔師古、孔穎達による『隋書』も司馬遷と班固以後の真心がこもった歴史書である。君卿〔杜佑〕の『通典』は事柄がよく調べられ、言葉遣いがよく練られ、貴与〔馬端臨〕による浅はかなものとは全く異なる。もとより彼らはみな経書の解説を理解していたからである。(近世、趙翼のような者が史書を編纂するものの、見識は非常に浅薄で、奥深い道理を探究することができないのは、彼らが得たものがもとより浅いからである。)残念ながら、六芸に精通している人たちは、礼の低いところにとどまっただけで〔頭を低くしてへりくだっただけで〕、智の高いところの効用に乏しい。彼らは古人と比べると、倚相、射父〔楚国の史官・大夫〕のよう

な〔典故に詳しい〕だけである。<sup>(28)</sup>必ず古代の経書の解釈を客体とし、新思想を主観とすることで、創始者に恥じないことができるであろう。

今、歴史を研究するには、国内の文献だけに頼るわけではない。昔の異聞や種族の史実は、洪積世の地層中に見え、旧来の歴史の及ばなかったところを補うことができ、外国人が支那のことに言及する場合は、一にも二にもこれらを称揚するのであって、これを古史といっても過言ではない。人類が未開の時は、東洋と西洋の状況も同じであったが、文化が進歩し、黄色人種と白色人種との違いが生ずるようになれば、必ず異同を比較し、そのうち優劣も自然と明らかとなり、経緯がようやくわかることもある。それゆえ、ギリシヤ、ローマ、インド、セムの諸史であつても、中国と無関係であるとは言えない。<sup>(31)</sup>もし心理、社会、宗教の各論であれば、自然の法則を明らかにし、多くの人々が共有するものなので、歴史書を作るうえでとりわけ要点となる。道家の人々は史官より生まれ出たのであり、莊子や韓非は古代のなんとよい史官ではないか。<sup>(32)</sup>

部署を設けて歴史書を編纂するのは、唐代から始まった。<sup>(33)</sup>宋代から明代にかけては、監修者のもと分担して編纂を行い、

散漫として紀律がなくなった。『明史』は季野〔万斯同〕によつて成り、<sup>(34)</sup>『宋史』や『元史』に比べるとやや優れているが、これもまたいくつかの伝をあわせて一つの史としただけである。多くの人がばらばらなことを言い、見方がそれぞれ異なり、抜群の見識があつたとしても、単著とすることができない。モンテスキューのいわゆる「昔のことについて話をする」ものは、<sup>(35)</sup>近年の歴史家のよい戒めである。今、『通史』を編纂するにあたって、その趣旨は一人で行うことにあるので、記述の詳しいか否かはおのずから異なってくる。その詳細でないところを知りたければ、旧史にみなあるので、それを参照すればよい。昔、『春秋』が完成して百国の歴史書が廃れ、<sup>(36)</sup>『尚書』が刪定されて『三墳』や『穆伝』が失われた。<sup>(37)</sup>もともと古代には木版が無かつたため、書物が伝わるのが難しく、また儒者は同じ考えのものが集まつて「書物を」簡略化したので、それらの散佚が生じたのである。しかし、子駿〔劉歆〕の『七略』では、「尚書家」に『周書』を収録しているようであり、『周官』のほかに、『周法』『周政』がまた別に「儒家」に見えるので、<sup>(38)</sup>もとより素王〔孔子〕が刪定した後、それ以外の古籍がすべて無用なものに比せられたというわけではないのである。<sup>(40)</sup>『通史』を作るのは、道を十分に正し、心

を定め導くためである。<sup>(1)</sup>その他の人の世の雑多なことに  
は、喜々として博覧を好む者の知りたいたいことが尽きるはずは  
なく、旧史の具体について、「彼らは」それを縦覧して厭くこ  
とがないだろう。「ゆえに」もし新しい歴史がすでに出来上  
がったので、旧文は廃すべきだと言うのであれば、それは見  
識の狭い見方である。<sup>(2)</sup>

### 中国通史目録<sup>(3)</sup>

表

帝王表 方輿表 職官表 師相表 文儒表

典

種族典 民宅典 浚築〔治水灌溉〕典 工芸典 食貨典 文  
言典 宗教典 學術典 礼俗典 章服〔礼服〕典 法令典  
武備典

記

周服〔五服、京畿を中心に五〇〇里ごとに区画〕記 秦帝  
記 南胄記 唐藩記 党錮記 革命記 陸交記 海交記 胡  
寇記 光復記  
考記

秦始皇考紀 漢武帝考紀 王莽考紀 宋武帝考紀 唐太宗考紀 元

大祖考紀 明大祖考紀 清三帝考紀 洪秀全考紀

別録

管〔仲〕・商〔軼〕・蕭〔何〕・〔諸〕葛〔亮〕 別録 李斯別録  
董〔仲舒〕・公孫〔弘〕・張〔湯〕 別録 崔〔浩〕・蘇〔綽〕・王  
〔安石〕 別録 孔・老・墨・韓別録 許〔衡〕・二魏〔魏裔介・  
魏象枢〕・湯〔斌〕・李〔光地〕 別録 顧〔炎武〕・黃〔宗義〕・  
王〔夫之〕・顏〔元〕 別録 蓋〔寬饒〕・傅〔幹〕・曾〔靜〕 別  
録 王猛別録 辛〔棄疾〕・張〔世傑〕・金〔声桓〕 別録 鄭〔成  
功〕・張〔煌言〕 別録 多爾袞別録 張〔廷玉〕・鄂〔爾泰〕 別  
録 曾〔國藩〕・李〔鴻章〕 別録 楊〔雄〕・顏〔之推〕・錢〔謙  
益〕 別録 孔〔融〕・李〔紱〕 別録 康有為別録 遊俠別録 貨殖  
別録 刺客別録 會党別録 逸民別録 方技〔天文、占卜等〕 別録  
疇人〔曆算學者〕 別録 叙録

訳注

(1) 荀悦(一四八―二〇九年)は、字が仲豫、班固『漢書』に基づ  
き、編年体の『漢紀』を著す。劉知幾『史通』内篇、六家。袁枢  
(一一三―一二〇五年)は、字が機仲、『資治通鑑』を項目別に  
分類し、『通鑑紀事本末』を著す。

(2) 杜佑(七三五―八一二年)は、字が君卿、『通典』を著す。馬端  
臨(一二五四―一三三三年)は、字が貴与、『文獻通考』を著す。

「分析法」については、章学誠『文史通義』内篇四、釈通に「文獻通考」之類、雖做『通典』、而分析次比、実為類書之学。書無別識通裁、便於对策敷陳之用」と見える。

(3) この両者の評価については、章炳麟『史学略説』（一九三五年）に「『通典』事実多而議論少、『通考』録議論至多」云々と見える。前掲『章太炎全集』演講集、九六二―九六四頁。

(4) 王夫之（一六一九―一六九二）は、湖南衡陽の人、通称は船山、明末清初の学者、代表作に『読通鑑論』、『宋論』がある。

(5) 原文は「譬諸織女、終日七襄、不成報章也。」「詩経」小雅、大東に「跂彼織女、終日七襄、雖則七襄、不成報章」と見える。

(6) 王鳴盛（一七二二―一七九七年）は、字が鳳喈、『十七史商榷』などを著す。錢大昕（一七二八―一八〇四年）は、字が晚徵、『二十二史考異』などを著す。いずれも清代の代表的考証学者で史学に秀でた。

(7) 原文は「豈無識大、猶媿賢者」。『論語』子張「賢者識其大者、不賢者識其小者」をふまえる。

(8) 原文は「鉤汲智沈」。「智沈」は「智井沈書（枯れ井戸に書物を沈める）」の故事を指すか。南宋の遺民鄭思肖（一二四一―一三二三年、字は所南）は、滅亡した宋を思慕して『心史』にまとも、蘇州承天寺の井戸に沈め、明末に発見された。章炳麟は幼少時に鄭所南の書を読み、民族思想が刺激されたという。「東京留學生歓迎会」（一九〇六年、前掲『章太炎全集』演講集）、一頁。

(9) 原文は「庶幾異夫策鋒、計簿、相斫書之為者矣」。「策鋒」は科挙試験における策論の参考書を指す。「永嘉八面鋒」に由来する。

(10) 『史記』八書と『漢書』十志に始まり、礼楽、刑法、地理、天文などを記す。劉知幾『史通』内篇、書志に「夫刑法礼楽風土山川、求諸文籍、出於三礼。及班馬著史、別裁書志。考其所記、多効礼経。且紀伝之外、有所不尽、隻字片文、於斯備録。語其通博、

信作者之淵海也。原夫司馬遷日書、班固日志、蔡邕日意、華嶠日典、張勃日録、何法盛日説。名目雖異、体統不殊」と見える。

(11) 原文は「彪蒙之用、斯揚推大端」。底本の句説を一部あらためた。『漢書』叙伝下に「揚推古今、監世盈虚」と見える。

(12) 鄭樵（一一〇四―一一六二年）は、字が漁仲、その著『通志』の疎漏については、章学誠『文史通義』内篇五、答客問中に「馬氏『通考』之詳備、鄭氏『通志』之疏舛、三尺童子所知也」と見え、章炳麟『史学略説』にも「然『通志』疎漏殊甚、不僅言天文可笑、言地理亦可笑」と見える。前掲『章太炎全集』演講集、九六二頁。

(13) 鄭樵が「略」に意を用いたことについては、『通志』総序に「臣今総天下之大学術而条其綱目、名之曰略、凡二十略、百代之憲章、学者之能事、尽於此矣。其五略、漢・唐諸儒所得而聞。其十五略、漢・唐諸儒所不得而聞也」と見える。

(14) 華嶠（生没年不詳）は、字が叔駿、魏末から西晋にかけての軍人・政治家。『漢紀』を改訂し、志を改めて典とした。

(15) 章学誠（一七三八―一八〇一年）は、字が実齋、清代の史学者、『文史通義』、『校讐通義』などを著す。『文史通義』では、『尚書』が「円にして神」であって、史書として最高であるとし、さらに袁枢『通鑑記事本末』を「真の『尚書』の遺」であると高く評価した。同書、内篇一、書教下。

(16) 原文は「靜以臧往、動以知來」。「易」繫辭上伝「神以知來、知以臧往」をふまえる。当時、章が翻訳した岸本能武太著『社会学』（一九〇二年訳）、序論、第四節に「観社会学家所持論、或曰社会以自然方法而進歩、或曰社会之進歩可以人為方法促進之、且不得不促進之。前者自社会静止之方面觀察。後者自社会轉動之方面觀察。故前者称静止社会学。後者称轉動社会学」と見える。前掲『章太炎全集』訳文集、六〇頁。

(17) 前漢の文帝（在位前一八〇—前一五七年）と景帝（在位前一五七—前一四一年）は、秦末の混乱によって衰退した社会経済を回復させ、のちに「文景の治」と称された。

(18) 房玄齡（五七八—六四八年）は、名が喬、魏徵（五八〇—六四三年）は、字が玄成、いずれも唐太宗時の名相。

(19) 胡亥（在位前二〇一—二〇七年）は、始皇帝の子、第二代皇帝、太子を殺害して擁立された。李林甫（？—七七二年）は、唐代の宰相、玄宗の寵臣、陰險で策略が多かったという。

(20) 陳寿（二三三—二九七年）は、字が承祚、『三国志』を編集した。『益部耆旧伝』は佚書で、『華陽国志』原序に「因撫而漢史、陳寿『蜀書』益部耆旧伝、互相參訂、以決所疑」と見える。

(21) 「誓史」は「周礼」秋官、大行人に「九歳、属誓史、論書名、聽声音」と、「巫祝」は「礼記」檀弓下に「君臨臣喪、以巫祝桃茢執戈、惡之也」と見える。

(22) 「保章」は「保章正」を指し、唐代の官名、宋・高承『事物紀原』九寺卿少、保章正に見える。「靈台」は「靈台丞」を指し、漢代太史令の属官、『後漢書』百官二、太史令に見える。

(23) 原文は「神話」、*Myth*の訳語、この語は一八九九年に高山林次郎が発表した「古事記神代卷の神話及び歴史」を嚆矢とするという。天沼春樹「神話概念の変遷Ⅱ—翻訳語としての『神話』をめぐって（上）」（『城西人文研究』一三卷、一九八六年）、二二—三二—三九頁。

(24) 譙周（二〇一—二七〇年）は、字が允南、三国蜀国の歴史家、代表作『古史考』を残したが、宋元の際に散逸した。劉知幾『史通』外篇、古今正史に「譙周以遷書周秦已上、或采家人諸子、不專挹正經、於是作古史考二十五篇。皆憑旧典、以糺其繆。今則与史記並行於代焉」と見える。

(25) 顔師古（五八一—六四五年）は、字が籀、孔穎達（五七四—六

四八年）は、字が沖遠、いずれも唐代の学者、『隋書』の編纂に参加した。

(26) 趙翼（一七二七—一八一四年）は、字が耘松、『廿二史札記』を著す。

(27) 原文は「滯于礼卑而乏智崇之用」。『易』繫辭上傳に「子曰『易』其至矣乎？夫『易』、聖人所以崇德而広業也。知崇礼卑、崇効天、卑法地」と見える。

(28) 倚相（生没年不詳）、春秋楚国の左史、「良史」とされた。射父は、親射父（生没年不詳）、春秋時代楚国の大夫。『国語』楚語下に「楚之所宝者、曰親射父、能作訓比率（中略）又有左史倚相、能道訓典、以叙百物」と見える。

(29) 原文は「作者」、司馬遷と班固を指すだろう。

(30) 原文は「西膜」。『暹書』（重訂本）序種姓上に「其『伝』言西膜者、西米特科、旧曰西膜、亜細亜及前後巴比倫（前巴比倫即加爾特亜）皆其種人」、「西膜民族、始見猶太『旧約』、本諾亜子名、其後以称種族、遂名其地」と見える。前掲『章太炎全集』暹書重訂本、一七五—一七六頁。

(31) 一九世紀末、フランスのラクペリ（*Ferrié de Lacouperie*）は中国文明の起源がバビロニアにあるという説を提出した。のち一九〇〇年にこの説が白河次郎・国府種徳編『支那文明史』によって紹介され、さらに清末の学術界にも伝わった。章炳麟もこの説の影響を受けており、こゝでの記述はこれをふまえていると考えられる。石川禎浩「二〇世紀初頭中国における『黄帝』熱—排滿・肖像・西方起源説—」（『二十世紀研究』三号、二〇〇二年）参照。

(32) 『漢書』芸文志「道家者流、蓋出於史官」をふまえる。「与呉君遂」九（一九〇二年）には、「前史既難当意、讀劉子駿（歆）語、乃知今世求史、固当於道家求之。管、莊、韓三子、皆深識進化之理、是乃所謂良史者也」と見える。前掲『章太炎全集』書信集、

一一八頁。

(33) 原文は「設局修史、始自唐代」。『旧唐書』職官志、史館に「歷代史官、隸秘書省著作局、皆著作郎掌修國史。武德因隋旧制。貞觀三年閏十二月、始移史館於禁中、在門下省北、宰相監修國史、自是著作郎始罷史職」と見える。

(34) 万斯同（一六三八—一七〇二年）は、字が季野、浙江省郵県の人、「明史」のもととなる『明史稿』を著した。

(35) 原文は「孟德斯鳩所謂「古事談話」者。モンテスキュー（一六八九—一七五五年）は、フランスの啓蒙思想家、中国では梁啓超「法理学大家孟德斯鳩之学説」（一九〇二年）、嚴復訳「法意（法の精神）」（一九〇九年）等によって紹介された。これらに「古事談話」は見えず、詳細は不明。

(36) 原文は「昔春秋作而百国宝書崩」。『春秋公羊伝注疏』隱公第一に「昔孔子受端門之命、制『春秋』之義、使子夏等十四人求周史記、得百二十国宝書、九月經立」と見える。

(37) 「三墳」は伝説中の古書。『春秋左氏伝』昭公十二年に「左史倚相（中略）是能說三墳、五典、八索、九丘」と見える。『穆伝』は「穆天子伝」、西周穆王の旅行記、長く佚書であったが、晋大康二年（二八一年）、河南汲冢の戦国時代の王墓から出た竹書（『汲冢周書』）によって五巻にまとめられた。

(38) 劉歆（？—一三年）は、字が子駿、父劉向とともに、六芸群書を種別して「七略」を作り、経籍目録の学を始めた。『周書』はいわゆる「逸周書」あるいは「汲冢周書」であり、長く佚書であった。周代の王の言行や制度を記す。『漢書』芸文志、六芸略、書に「周書七十一篇」と見える。

(39) 『周官』は「周礼」のこと。『漢書』芸文志、六芸略、礼に「周官經六篇」と見え、同諸子略、儒家に「周政六篇」「周法九篇」と見える。『周政』『周法』はいずれも亡んで伝わらない。

(40) 原文は「固非謂素王刪定以後、自余古籍、悉比於吐果棄葉也」。

古文派の章炳麟は孔子を教主とは考えなかったが、ここでは康有為と同様、孔子を「素王」と称している。「吐果棄葉」は先人がすでに捨てた記録で、それをもう一度あつめても無用であることを指す。劉知幾『史通』内篇、補注に「譬夫人有吐果之核、棄葉之滓、而愚者乃重加拮拾、潔以登薦、持此為工、多見其無識也」と見える。

(41) 原文は「審端徑陘、決導神思」。「審端徑陘」はもとと田の道や溝を整理する意。『礼記』月令「皆修封疆、審端徑術」の孔穎達疏に「令農夫皆修理地之封疆、審正田之徑路及田之溝洫」と見える。「神思」は、隱者の身でありながら宮廷に思いを馳せること。

(42) 原文は「斯則拘虛篤時之見也已」。『莊子』外篇、秋水に「北海若曰、井鼃不可以語於海者、拘於虛也。夏蟲不可以語於冰者、篤於時也」と見える。

(43) 前掲「章太炎來簡 壬寅六月」にも「史目」が掲げられており、この「中国通史目録」と一部異同がある。異同の詳細については、前掲湯志鈞「中国通史目録」和「新史学」参照。

## 二、読史と文化復興との関係

文化の二字は、含意がいたって広く、にわかには数えきれないほどである。今、国の歩みは困難な状況にあり、文化の復興を望むのであれば、実際の側面からこれを言うのであれば、どうしてうまくいくだろうか。

今の学校は、学校が全てを網羅しようとし、教師は滔々と講釈し、学生は息を殺してつき従うばかりで、自習にはげむことが欠如している。これより、歴史科は学校で重視するに足らないとみなされ、講義するのはごく僅かな一部にすぎない。思うに、歴史書は多いけれども道理が浅く、自習するにはよくても聴講するには適さず、科学が講義すべきものであるのとは大きく異なっている。今は口頭による講義科目のなかに並べられているが、それによって話せる内容がどれほどあろうか。こうして史部の書物はほとんどが高い書棚の上に放置されてしまうのである。昔、『綱鑑易知録』<sup>①</sup>は学者がこれをいやしんで科挙の受験参考書とみなしたが、今やこれをよく読むものすらすでに通人である。なんと嘆かわしいことではないか。思うに、歴史はこれをたとえるならば一国の帳簿であり、いくらかの財産を持っているもので、家に一つの帳簿も置かないものはいないだろう。その帳簿に照らせば、ただちに財貨や土地がどれほどあるのかが一目瞭然となる。国民たる者がどうして一度も自国の帳簿を開かないことがあつてよいだろうか。中国は面積が大きく、歴史が長いので、史書や諸もろの地誌を読まずして、どうして自国のあらましを知ることできょうか。しかも、歴史はただ帳簿と比べられ

るだけのものではなく、過去に照らして未来を知り、古を参照して今を証明し、囲碁を打つ者が棋譜を見て、古い棋譜に習熟すれば、新たな局面がおのずと創造されてくるようなものでもある。天下に事変は多いが、我々がこれに対処する際ゆつたりとできるのは、思うに、対処する方法が、昔の人の言行の中に往々にして既成の例としてあり、参考にすることができからである。歴史が我々にとつて有益なのはこのようであるのだ。「しかし」今は「歴史を」いやしんで言うことをはばかってしまうので、国の事態が日に日に差し迫っているとこのくに、これに対処するもので、うまくやりくりできない苦しみをもらさないものがほとんどないありさまである。<sup>②</sup>

今、一つその例を挙げよう。試みにたずねるに、ベトナム安南、ミャンマー緬甸、朝鮮は、かつて中国とどのような関係にあつたか。また、ネーパール熱河、チベット察哈爾、チベット綏遠の昔の状況はどうだつたか。これについて詳しく答えられる者は、いったいどれほどいるだろうか。考えるに、安南は、昔、広東、広西と同様に百粵と称され、漢漢の武帝が南粵を平定し、日南日南や九真などの郡を置き、<sup>③</sup>これよりのち、安南の人で朝廷に出仕する者は代々少なくなかつた。しかし、唐末・五代に至ると、「その地は」<sup>④</sup>だんだん

と失われていった。明の成祖の時代に、再び武力を用いて回復し、交趾省を設け、<sup>(5)</sup>かつては科擧を行って役人を選んだが、ほどなくして失われた。<sup>(6)</sup>その人種は広東人と異なるところがなく、言語もきわめて似通っており、これは漢代から唐代に至るまで、中国の郡県であったのが一千年以上だったからだろう。<sup>(7)</sup>朝鮮も漢代はまた郡県であり、すなわち楽浪郡であった。後漢以降、しだいに我が属ではなくなっていた。人種は満洲と似ていて、夫余種と称されるが、<sup>(8)</sup>満洲は挹婁種である。<sup>(9)</sup>匈奴は明代には雲南の土司に属して、つまり雲南省の一部であったが、「明の」三百年のあいだに叛乱と征伐が繰り返され、さきに王驥が、のちに劉綎があらわれ、「明史」はその戦功をはつきりと記載している。<sup>(11)</sup>これが三属国の故事である。古代の朝鮮の領域については、もともと満洲發祥の地を内に含んでいたことを知らないわけにはいかない。<sup>(12)</sup>満洲という呼称は、明代には無く、その種族は女真といった。女真の類は、およそ百余年あり、これを大別すると三つであり、(一)建州女真、(二)海西女真、(三)野人女真である。いわゆる満洲發祥の地というのは、建州女真を指している。<sup>(14)</sup>建州は清代の興京〔今の撫順〕であり、<sup>(15)</sup>愛新氏の祖先はこの地に起こった。海西女真は鉄嶺〔今の遼寧省北部〕あたりに散居していた。野人

女真は、使犬・使鹿といった種族で、魚皮韃子の類である。<sup>(16)</sup>『史記』が称するところの東胡は、<sup>(17)</sup>鮮卑や烏桓などの族であり、常に匈奴に対抗していた。漢の版図は、東北では、遼東・遼西の対岸に居住していた。漢の版図は、東北では、遼東・遼西を除くと、なお玄菟、楽浪などの郡があった。明は遼東都指揮使司を設け、<sup>(18)</sup>都司の東北が興京であり、すなわち漢代の玄菟郡である。『史記』は燕の將軍秦開が東胡を撃破し、東胡が千里あまり退き、当時、燕の領域が朝鮮にまでひろがっていたことを記載している。<sup>(19)</sup>漢初、衛満がふたたび朝鮮を占拠し、<sup>(20)</sup>武帝の時代に至って兵を用いて回収し、朝鮮四郡を定めた。すなわち、楽浪、真番、玄菟、蒼海がそれである。<sup>(21)</sup>その後、真番、蒼海は再び廃止されたので、楽浪、玄菟だけが存続した。遼東の諸地は唐末にまた失われたが、明代に再び遼東を回復した。明の將軍熊廷弼は清兵と瀋陽、広寧で対峙したが、<sup>(22)</sup>広寧はすなわち今の錦州の東北の地であり、いわゆる医無閭山はここに<sup>(23)</sup>ある。

熱河、察哈爾、綏遠の三特区の沿革についても、ここであらましを述べよう。考えるに、北平〔今の北京〕は漢代には右北平郡と称されていて、つまり今日の喜峰口あたり、盧龍、遵化などのところであり、「右北平郡中の」六県は今の長城以



外にあり、平剛はすなわち今の平泉であり、白狼はすなわち今の凌源であり、右北平太守はここに駐屯していたのである。<sup>(25)</sup>曹操は烏丸まで北征し、柳城まで至って帰還し、その柳城は今の朝陽〔今の遼寧省北部〕である。<sup>(26)</sup>これらはみな中国の所轄の境内にあり、当時は決して境域外とはみなされていないからなのである。綏遠の河套地域は、漢では朔方郡とされ、河套の北は、秦の九原郡であり、その東は雲中郡であり、漢の雲中郡には託克託と和林格爾などを含む。<sup>(27)</sup>漢には定襄郡があり、今ではすでにその場所を明確に示すことができないが、おそらく今の察哈爾であろう。<sup>(28)</sup>秦は長城を建設し、臨洮から遼海に至り、<sup>(29)</sup>河套以東の郡県は、みな長城以内であり、漢の境界は河套の北、つまり陰山の下までである。<sup>(30)</sup>後に契丹、蒙古が代わる代わる侵入するに及んで、国土は日々縮小していった。明代の長城は南に移り、こうして秦、漢の辺境の郡県は、今日から見れば、いずれも塞外〔長城の外〕にあるように見えてしまふ。察哈爾は明代には察罕と称し、<sup>(31)</sup>熱河は明代には朵顔と称し、<sup>(32)</sup>朵顔は地形が険しく兵が強く、その人種は契丹などの種であった。<sup>(32)</sup>明の成祖が〔のちの熱河省に位置した〕大寧衛を放棄して兀良哈等に与え、<sup>(33)</sup>明末にいたって初めて建州の夷人〔満洲族〕の統治下に組み込まれた。河套は明の英宗の時

代に毛里孩らに占拠され、その後、楊一清、曾銑、夏言がしばしば回復しようとして提案した。<sup>(35)</sup>これよりこの地が明初には確実に中国に属していたことがわかり、なおかつ明代には常に察哈爾、綏遠、熱河に人を派遣して宣撫しており、いつそう我が国の管轄であったことを証明できる。これが三特別区の話である。

今、さらに諸君に伝えたいのは、東北三省の土地は広く、昔から漢人が烏桓、鮮卑などの種族と雑居・通婚していたが、女真人の数はたいへん少なかったことである。明代の漢人で東北三省にいた者は四、五百万人であり、清末に至ると三千万人いたが、女真人は百万にも及ばなかった。<sup>(36)</sup>清の太祖〔ヌルハチ〕が拳兵したときに遡ると、純粋な女真人は数十万に過ぎず、中国に入り主になった後は、多数の人を連れて関内に入ったが、八大駐防及び京旗は、せいぜい五、六十万に過ぎなかった。<sup>(37)</sup>二百年來、しだいに同化され、今に至っては純粋な漢人が少しも見られないので、当初からその人種が多くなかったことがわかる。そうでなければ消滅がどうしてこれほど速いだろうか。ゆえに東北三省の住民について論じれば、漢人が最多で、満人はその百分の一を占めるに過ぎない。これらごく少数の満人が三省に散居し、ほとんど湖南・広西の苗、四

川の番、雲南の蛮のようであつて、どうして民族自決を口実にすることなどできようか。<sup>(38)</sup>日本人は「東北三省の満人は五百万いる」と唱えたが、これはわざと偽つたものであり、絶対に事實ではない。しかし、わが国の人にも深く信じて疑わぬ者がいるのは、ただ古い帳簿を見ていないだけでなく、張宗昌の「三不知」と異なるところがない、<sup>(40)</sup>ということでもある。以上に述べたことは、史実の一部に過ぎず、今、わざわざ提起したのは、書が目前にあるため、口酸っぱく説くのを憚つていられないからである。

古から今まで、事変はきわめて見定めがたく、これに対処するには、原則に従つて処理することもあれば、臨機応変に処理することもあり、<sup>(41)</sup>その利害得失を見て、会合変通を悟るのが史書を読む利点である。思うに、人の経験が広ければ知識も多く、知識が多ければ、横暴な行為に遭遇しても、怖じ気づくことがない。ゆえに史書を読む場合、一事の本末（一部始終）を一貫させ、そのこじれのありかをつまびらかにし、原因と結果を心中に明らかにして、しかも一代の典章制度にも習熟し、詳しく知っておくべきである。<sup>(42)</sup>歴史学を治めるには、記憶力に頼り、全て悟性に頼るわけではなく、暗記・暗唱して初めて得るものがある。口で話し耳に聞くことで得ら

れる効果は、はたしてどれほどであろうか。およそ列伝を読む場合、一時間で一卷を読み終えることができ、史書の精華は三、四千巻に過ぎないので、三年間ですべて読み終えることができる。今の人はただ史書を読むのを好まず、ゆえに不慮の災いがやってきた時に、おそれてどうしたらいいのかわからなくなってしまうのであり、どうして嘆かないでいれようか。

『春秋左氏伝』には、「皮がなければ、毛はどこにつくことができようか」とある。<sup>(43)</sup>史学は様々な学問のなかで皮に喩えることができる。子羊のうわぎを豹皮でふちどっているものは、その毛を愛しんで皮を愛しまないが、そもそも皮がなければ毛がどこにつくのかをわかっているのだろうか。インドは世界で古い国の一つであり、科学や哲学が並はずれて優れていて、寛大なる仏教はここに誕生し、幾何学もまたインドからギリシヤに伝わり、<sup>(44)</sup>医学は胃腸を摘出するまでに至り、ゆつたりと落ち着いていて、その文化はきわめて高いと称えられる。しかし、それを記録する歴史（書）がなく、今に至ってもインド人はかつての政教を追慕することができない。<sup>(45)</sup>新疆の住民は、今、回部があつたのを知っているが、<sup>(47)</sup>前・後漢時にはそれがともと三十六国であつたことを知らない。班（固）・

范〔暉〕二つの史書〔『漢書』と『後漢書』〕はそれをたいへん詳しく記載している。<sup>(48)</sup>ただ三十六国に〔自前の〕歴史がないため、その人種は今に至るもはつきりとせず、考えるためのよすががないのである。そうであるならば、歴史がないことの弊害はなんととはつきりと見てとれるではないか。国家の安危強弱はもとより一定ではなく、国民たる者はまず自分がどの民族であるのかをはつきりと認識しなければならぬ。自国の文化に対しても尊重して発揚するならば、一時の不幸によつて国土の光景が変わつてしまつたとしても、最後には必ず復興の日が来る。もし国民が歴史を卑しめ、本国の文化をないがしろにすれば、本当に本来の性質を見失つてしまい、未来永劫に回復できなくなつてしまふのである。

歴史が国の根本に有する關係はいたつて大きい。秦は六国〔戦国時代、秦に対抗した六諸侯国〕を滅ぼし、六国の史書をことごとく燃やした。<sup>(49)</sup>朝鮮が亡んだ後、日本人はその史籍を隠し、朝鮮人の目にふれさせなかつた。<sup>(50)</sup>今日の中国の状況について見れば、人々は学ぶことをよるこぼさず、史冊は高い書棚の上に置きっぱなしで、もしこれで天下に戦乱がおこり、ふたたび外族の侵入による災禍に見舞われたならば、新たな国家〔中華民国〕の教育が三十年経たずして、漢の太祖や唐の太宗

を知っているものは誰もいなくなり、百年後には炎黄〔炎帝と黄帝〕の子孫はきつとみな異民族に同化してしまつていだらう。そうであれば、今、文化を復興しようという際に、歴史書を読むことに注意を払う以外、その方法には何があるうか。

## 訳注

(1) 呉乗権等撰、九二卷、康熙五〇年（一七一二年）序。三皇から明代までを綱目体で記した通史。

(2) 章炳麟はかねてより歴史教育に批判的であつた。歴史教育において「耳学」より「眼学」を、「講授」より「自修」を重視すべきことを繰り返し訴え、また日本の東洋史教科書に由来する簡略化された教材を「歴史ではなく歴史教科書である」と批判した。前掲「中国文化的根源和近代学問的發達」、七五—八六頁、「教學弊論」（一九二四年、前掲『章太炎全集』太炎文録統編）、八八—九六頁、「論今日切要之学」（一九三二年、前掲『章太炎全集』演講集）、四二〇—四二二頁。

(3) 百粵については、『漢書』地理志下、粵地に附された臣瓚注に「自交阯至会稽七八千里、百越雜処、各有種姓、不得尽云少康之後也」と見え、会稽（今の浙江省紹興）から交阯（今のベトナム北部）に及ぶ広範囲にあつた雑多な種族を指す。「粵」は「越」とも書く。

(4) 『漢書』武帝紀に「遂定越地、以為南海、蒼梧、鬱林、合浦、交阯、九真、日南、珠崖、儋耳郡」と見える。

(5) 『明史』成祖本紀に「(永樂五年)六月癸未、以安南平、詔天下、置交趾布政司」と見える。

(6) 『明史』選舉二に「交趾初開以十名為額、迨棄其地乃止」と見える。

(7) 顧祖禹『讀史方輿紀要』広西七、外国附考に「山居贅論曰、安南、自秦漢以來、入中国版図者歷千百年。其比於外臣、特自宋以後耳」と見える。

(8) 夫余については、『三國志』魏書、夫余伝に「夫余在長城之北、去玄菟千里、南与高句麗、東与挹婁、西与鮮卑接、北有弱水、方可二千里」と見え、また『旧唐書』東夷伝、高麗に「高麗者、出自扶余之別種也。其国都於平壤城、即漢楽浪郡之故地、在京師東五千一百里」と見える。高麗は九一八年に建国、九三六年に朝鮮半島を統一した。

(9) 挹婁については、『後漢書』東夷列伝に「挹婁、古肅慎之国也。在夫余東北千余里、東滨大海、南与北沃沮接、不知其北所極。土地多山險。人形似夫余、而言語各異」と見える。

(10) 緬甸における土司の設置については、『明史』雲南土司三に「永樂元年、緬西那羅塔遣使入貢。〔中略〕詔設緬甸宣慰使司、以那羅塔為宣慰使、遣内臣張勤往賜冠帶、印章。於是緬有二宣慰使、皆入貢不絶」と見える。

(11) 王驥(一三七八一—一四六〇年)は、字が尚徳、兵部尚書として雲南の軍務を総督、その後麓川に対する征討で功績を立てた。『明史』王驥伝および雲南土司二。劉綎(一五五八一—一六一九年)は、字が省吾、緬甸が雲南に侵入した際、騰越の軍を率いて征討した。『明史』劉綎伝。

(12) 章炳麟は排滿を唱えたことから清の歴史を研究し、その開国以前の歴史を採った『清建国別記』(中華書局、一九二四年、いま前掲『章太炎全集』清建国別記)を上梓している。「建州方域攷」

等数篇が収録される。

(13) 女真はまた女直といい、その種類については、『万曆』大明会典「朝貢三、東北夷に「蓋女直三種、居海西等処者、為海西女直。居建州毛憐等処者、為建州女直。〔中略〕其極東為野人女直。野人女直去中国遠甚、朝貢不常。海西建州、歳一遣人朝貢」と見える。

(14) 満洲の発祥地については、『清史稿』太祖本紀に「太祖」姓愛新覺羅氏、諱努爾哈齊。其先蓋金遺部、始祖〔中略〕居長白山東俄莫患之野俄朵里城、号其部族曰満洲、満洲自此始。元於其地置軍民万户府、明初置建州衛」と見える。

(15) 興京、旧名は赫図阿喇、清の発祥地とされる。清の皇始祖肇祖原皇帝がはじめて赫図阿喇に居住し、天命元年(一六一六年)に太祖ヌルハチが後金の都とした。その後、都を瀋陽に移し、瀋陽を盛京、赫図阿喇を興京と尊称した。『乾隆』欽定大清一統志」卷三六。

(16) 「使犬」、「使鹿」、「魚皮」は中国東北の部族の名称。『皇朝(清朝)文獻通考』輿地考三に「自寧古塔東七百余里外、沿松花江、大烏拉江直至入海処、兩岸為赫哲費雅哈部所居、其俗不知耕種、以捕漁为生、其来往行獵並皆以犬、即所謂使犬部也、俗亦謂之魚皮部」と見える。

(17) 東胡については、『史記』匈奴列伝に「燕北有東胡、山戎」と見え、索隱注に「服虔云、東胡、烏丸之先、後為鮮卑。在匈奴東、故曰東胡」と見える。

(18) 『明史』地理二に「洪武四年七月置定遼都衛。六年六月置遼陽府、隕。八年十月改都衛、為遼東都指揮使司」と見える。

(19) 『史記』匈奴列伝に「其後燕有賢將秦開、為質於胡、胡甚信之。歸而襲破走東胡、東胡却千余里。〔中略〕燕亦筑長城、自造陽至襄平」と見える。

(20) 衛滿(生没年不明)は、衛氏朝鮮の建国者。『史記』朝鮮列伝に「朝鮮、王満者、故燕人也」、『三國志』魏書、韓伝に「侯準既僭号称王、為燕亡人衛滿所攻奪、將其左右宮人走入海、居韓地、自号韓王」と見える。

(21) 『漢書』武帝紀に「元封三年」夏、朝鮮斬其王右渠降、以其地为楽浪、臨屯、玄菟、真番郡」と見える。「蒼海」は「臨屯」の誤りだろう。

(22) 熊延弼(一五六九—一六二五年)は、明末の武將、万曆三十六年(一六〇八年)に遼東を巡按し、四七年に兵部右侍郎兼右僉都御史に任ぜられ、遼東経略を担った。『明史』熊延弼伝。

(23) 九州の一である幽州の「山鎮」(地方の安定を守る山)とされる山。「周礼」夏官司馬下に「東北曰幽州、其山鎮曰医無閭」と見える。

(24) 熱河特別行政区域、察哈爾特別行政区域、綏遠特別行政区域は、一九一四年に設置された省級行政区域、二八年に省に改編。周振鶴主編『中国行政区画通史・中華民国卷』(復旦大学出版社、二〇〇七年)、三八—三九頁。一九三三年一月に関東軍は熱河作戦(中国側呼称は「長城抗戦」)を開始、三月熱河省を占領、一時的に長城線を越えた。同年五月「塘沽停戦協定」を締結、国民政府は日本軍による東北三省と熱河省の占領を黙認した。

(25) 『漢書』地理志下に「石北平郡(中略) 県十六、平剛、(中略) 白狼、(後略)」と見える。喜峰口は河北省と熱河省の境界に位置し、長城の山海関と居庸関の中間に位置する軍事拠点、熱河作戦における主要な戦場となった。盧龍、遵化はいずれも長城以南、河北省に置かれた県、熱河作戦で日本軍が長城線を越えて進攻した。平泉、凌源は長城以北、熱河省に置かれた県、熱河作戦で日本軍が進攻した。武月星主編『中国現代史地図集—一九一九—一九四九—』(中国地図出版社、一九九九年)、七一頁。

(26) 建安一年(二〇六年)に魏の曹操が烏丸族の部長蹋頓を柳城に攻め殺したことを指す。『三國志』魏書、烏丸伝。朝陽は熱河省東南部に置かれた県、熱河作戦で日本軍が進攻した。

(27) 河套は綏遠省南部の地区、東西北を黄河に囲まれ、南は現長城に至る。匈奴など遊牧民族の放牧地であったが、秦の統一後、始皇帝はそこに雲中郡と九原郡を設置、漢の武帝はその西側に朔方郡を設置、遊牧民族と漢族が雜居することが多かった。臧勵穌等編『中国古今地名大辞典』(商務印書館、一九三三年)、五一—六一—五二頁。託克託と和林格爾は、綏遠省の県、省都帰綏(今のフフホト)の南に位置する。

(28) 『漢書』地理志下に「定襄郡(中略) 県十一」と見える。定襄郡は帰綏近くに置かれ、むしろ当時の綏遠省であろう。

(29) 『史記』蒙恬列伝に「秦已并天下、乃使蒙恬將三十万衆北逐戎狄、收河南。築長城、因地形、用制險塞、起臨洮至遼東、延袤万余里」と見える。臨洮は秦代に置かれた県、現在の甘肅省南部。原文の「遼海」は「遼東」を指すだろう。

(30) 『史記』匈奴列伝に「趙武靈王(中略) 築長城、自代並陰山下、至高闕為塞。而置雲中、鴈門、代郡」と見える。

(31) 察罕は、察哈爾地区、またその地に居住する元裔小王子が率いる蒙古部族を指し、明代に「插漢」と呼ばれた。前掲臧勵穌等編『中国古今地名大辞典』、一〇八六頁。

(32) 朵顔は今の内モンゴル自治区綽爾河流域の朵顔部にちなみ、モンゴル語で「兀良哈」ともいう。明は洪武二年(一三八九年)に朵顔、福余衛、泰寧の三衛を設置、「朵顔三衛」また「兀良哈三衛」と称した。『明史』外国九。

(33) 靖難の役に際し、のちの成祖永楽帝・燕王朱棣は兀良哈三衛の蒙古部族の力を借り、大寧衛を拠点とする寧王朱權の勢力を破ったことで、その報いとして、大寧の地を分割して、兀良哈三衛の

蒙古部族に授けた。『明史』外国九。大寧衛はのちの熱河省平泉、赤峰、朝陽などの地。

(34) 毛里孩(？—一四六八年)は、蒙古牛特部の部長。『明史』外国八に「成化元年」李来与小王子、毛里孩等先後繼至、擄中國人為鄉導、抄掠延綏無虛時、而辺事以棘。〔中略〕二年夏、大入延綏」と見える。「英宗」は「憲宗」の誤りか。

(35) 楊一清(一四五四—一五三〇年)、曾銃(？—一五四八年)、夏言(一四八二—一五四八年)はいずれも明中期の重臣。三者の河套回復についての提案は、『明史』兵志三、夏言伝に見える。

(36) 東北三省の漢人人口数については、乾隆五十一年(一七八六年)が奉天八〇・七万、吉林一四・八万、咸豊元年(一八五一年)が奉天二五八・二万、吉林三二・七万、光緒三十三年(一九〇七年)が東北三省併せて一四四五万人、宣統三年(一九一一年)が東北三省併せて一八四一万であったという。姜濤『中国近代人口史』(浙江人民出版社、一九九三年)、二〇六、二〇八頁。

(37) 清朝が北京に都を定めると、八旗の將兵が北京とその近郊に移住し、「京旗」と呼ばれ、ついで地方の要地に派遣され駐留するようになり、「八旗駐防」と呼ばれた。原文の「八大駐防」は「八旗駐防」のこと。『清史稿』兵志一。その兵数について、稲葉岩吉『清朝全史』には「魏源の説によれば、中外の禁旅駐防を通計して二十万有奇、而して北京にあるは、之に半ばすといひ、嘉慶中戸部の報告によれば、〔中略〕合計大約五十万有奇とせり、若し老幼婦女を合すれば、或は乃ち百五十万口内外を数ふべし、之を該時代に於ける八旗の全数とす」と見える。同書下巻(早稲田大学出版部、一九一四年)、四九頁。

(38) 「民族自決」は、関東軍による満洲事変の発動と満洲国樹立の根柢の一つとされた。石原莞爾「現在および将来における日本の国防」(一九二七年)には「滿蒙は漢民族の領土に非ずして、む

しろその關係我国と密接するものあり。民族自決を口にせんとするものは、滿蒙は満洲および蒙古人のものにして、満洲蒙古人は漢民族よりもむしろ大和民族に近きことを認めざるべからず」と見える。角田順編『石原莞爾資料・国防論策篇』(原書房、一九六七年)、山室信一『キメラ—満洲国の肖像—』(中公新書、二〇〇九年)、五八頁。

(39) 五百万説の出処は不明。稲葉岩吉の説は、「満洲人は、清末に於て、四百万にも近い大数を算するといふ」という。稲葉岩吉『満洲発達史』(大阪屋号出版部、一九一五年)、八一—八六頁。また、東北三省には限らないが、かつて章炳麟自身、「今以満洲五百万人、臨制漢族四百万人」云々と述べている。『駁康有為論革命書』(一九〇三年、前掲『章太炎全集』太炎文録初編、一八〇頁)。

(40) 張宗昌(一八八二—一九三二年)は、字が効坤、北京政府時代奉天派の有力者。当時、「兵を知らず、銃を知らず、彈丸を知らず」という「三不知將軍」として悪名高かった。「張宗昌之藏嬌窟」(『國聞新報』五卷二六期、一九二八年)。

(41) 原文は「処之者有經有權」。『朱子語類』論語一九に「經者、道之常也。權者、道之變也」と見える。

(42) 章炳麟はつとに他国の歴史学が「紀事本末」しかないのに比べ、中国の歴史学には「紀伝、編年、紀事本末、典章制度四大体」があり、より科学的であったと述べている。また日本の歴史教科書のように、簡略化された歴史が科学的であるとするならば、それは「削趾適履(かかとをけずって靴にあわせる)」ことだと批判している。前掲「中国文化的根源和近代学問的発達」、八二頁。

(43) 『春秋左氏伝』僖公十四年に「皮之不存、毛將安傅」と見える。

(44) 原文は「羔裘豹飾者」。『詩経』鄭風、羔裘に「羔裘豹飾、孔武有力」と見える。

(45) 原文は「行所無事」。『孟子』離婁下に「禹之行水也、行其所無

事也。如智者亦行其所無事、則智亦大矣」と見える。

(46) インドの初めての史書と呼べるのは、一二世紀にカシミールに出現した『ラージャタランギニー』というサンスクリット語の作品という。仏教に傾倒し、インドとの提携を唱えた章炳麟は、インドに歴史書がなかったことを惜しみ、中国が歴史を守るべきことを説いている。「印度中興之望」(一九〇七年、前掲『章太炎全集』太炎文録初編)、三七七八頁。

(47) 「回部」は清代に天山南路地方のイスラム教徒が定住した地を指した名称。天山北路地方の「準(ジュンガル)部」と併称された。両者は乾隆帝の遠征によって清に服属し、光緒九年(一八八二年)に新疆省が置かれた。『清史稿』地理一、二三三。

(48) 『漢書』西域伝には「西域以孝武時始通、本三十六国、其後稍分至五十余、皆在匈奴之西、烏孫之南」、『後漢書』西域伝には「武帝時、西域内属、有三十六国。〔中略〕哀平間、自相分割為五十五国」と見える。

(49) 『史記』六国表に「秦既得意、燒天下詩書、諸侯史記尤甚、為其有所刺譏也。詩書所以復見者、多藏人家、而史記独藏周室、以故滅。惜哉、惜哉」と見える。

(50) 章炳麟は、当時、清のルーツを調べるため、朝鮮の史籍の閲覧を望んでいたが、難しかったようである。「与日人橋川時雄談学」(一九三二年)に「韓国国史問甚敏富、但近亦秘藏難見。敝国因修清史、史稿雖就、而人多不满意、蓋于清之源流不能詳也。此在『明実録』及明人著述中頗有資料、然似不如朝鮮見聞之親切、故甚欲求朝鮮史觀之耳」と見える。前掲『章太炎全集』太炎文録補編、八四三頁。

(つちや ひろし 名古屋大学大学院人文学研究科准教授  
おう てんきよう 同大学同研究科博士後期課程学生  
こう じやくえん 同右  
かしま りな 同大学同研究科博士前期課程学生  
さし ふみな 同右  
しもだ あずさ 同右  
あさの とらい 同大学文学部学生)

